

秋田県仙北市仙北町南条字内木3-3  
仙北町公民館内  
秋田県弘田橋跡調査事務所

秋田県文化財調査報告書第51集

## 大内坂II遺跡発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1978・3

秋田県教育委員会

## 大内坂II遺跡発掘調査報告書 1978 正誤表

ページ	行	誤	正
3	下から4行目	遺量	荷量

## 序

国営能代開拓建設事業は、東北農政局能代開拓建設事業所が主体となり、地域農業振興のため農用地造成をおこなうものであります。事業は昭和51年度から59年度まで計画されており、当該地域に所在する周知の遺跡を工事施工前に調査し、記録保存をはかることになりました。

本年度は「大内坂II遺跡」の調査を実施しましたが、本報告書が地域の理解と文化財愛護の一助になれば幸いです。

おわりに、調査ならびに報告書作成にあたってご協力いただいた永瀬福男、川村 正、能代市教育委員会、東北農政局能代開拓建設事業所の方々に深く感謝の意を表します。

昭和53年3月

秋田県教育委員

教育長 畠山芳郎

## 目

## 次

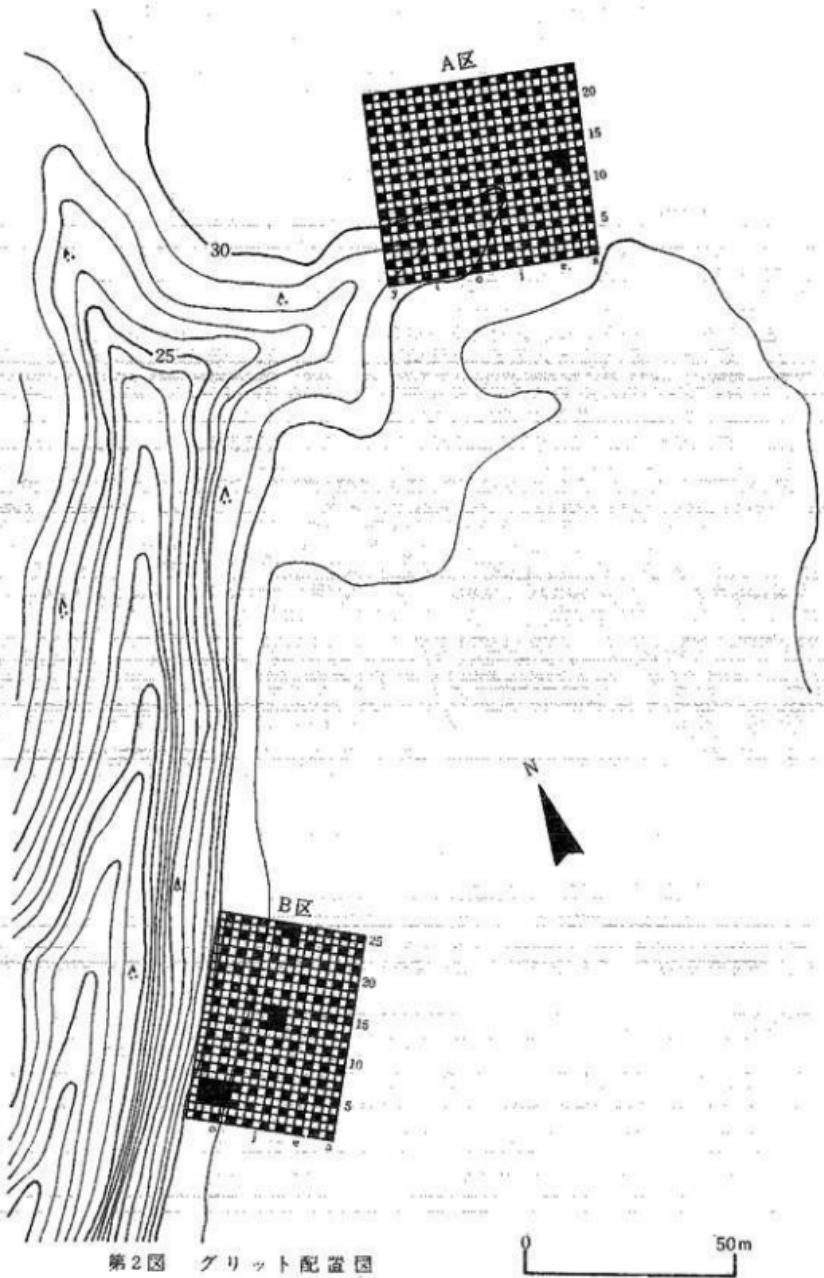
I 遺跡の立地と環境	3
II 発掘調査に至るまでの経過	3
III 調査の概要	4
IV 出土遺構と遺物	5
V 遺構外出土遺物	9
VI む　す　び	9
図1 遺跡の位置および周辺地形図	1
図2 グリット配図	2
図3 坂穴住居跡	5
図4 坂穴遺構	6
図5 B区遺構外出土遺物	7
図6 B区遺構外出土遺物	8
図版1 遺跡遠景・発掘調査風景	11
図版2 坂穴住居跡及び炉	12
図版3 坂穴遺構及び土器出土状況	13
図版4 B区坂穴出土遺物	14



第1図 遺跡の位置および周辺地形図

1:50,000 能代

(● 大内坂II遺跡 ○ 遺物包含地)



第2図 グリット配置図

## I 遺跡の立地と環境

大内坂II遺跡は、秋田県能代市久喜沢字大内坂43番地、他に所在する。久喜沢部落の西側の農道を登ると広大な東雲台地が開ける。遺跡は、東雲台地の南縁に位置し、標高30mである。

東雲台地は、水田を中心とした畠地、放牧場、牧草地として利用されている。近年、藤里町素波里ダムから灌漑用導水路が建設され、東雲台地の環境は急激に変化しつつある。

大内坂遺跡の現況は、みょうが畑と雑木林であったが、発掘調査時には、雑木林はブルトーザーで掘りおこされ、みわたすかぎり荒涼としていた。急激な変化は、この遺跡にも押しよせていたのである。

遺跡の下には、米代川がいくぶん蛇行しながら西流し、日本海に注ぐ。日本海から遺跡までの距離は約7.5kmである。

日本海と米代川は、古代から現在にいたるまで、能代市のみならず、県北地方の政治、経済、文化に大きな影響をおよぼしてきた。このことは、米代川河口付近が歴史に登場するのが、県内でも古いことからも理解できる。すなわち、658年には、阿倍比羅夫が渟代港に上陸し、渟代郡を設置、「日本書紀」。771年には、渤海國使一万船、17隻の船に325人を乗せ野代に漂着「続日本紀」。878年、野代當を守ろうとした兵600人が、千余人の賊に襲われて敗走「三代実録」。これらの記録は、米代川河口周辺が早くから、人々によって開拓されていたことを示すものであろう。

米代川の河口周辺の台地には、縄文時代から歴史時代にいたるまで数多くの遺跡が点在する。このうち発掘調査された遺跡は、米代川北岸では金山チャシ<sup>(1)</sup>、平影野<sup>(2)</sup>、八森坂<sup>(3)</sup>、中台遺跡<sup>(4)</sup>、南岸では大館遺跡<sup>(5)</sup>、柏子所貝塚<sup>(6)</sup>がある。

## II 発掘調査に至るまでの経過

### 1. 調査の目的

国営能代土地改良事業は、東北農政局能代開拓建設事業所が主体となり、地域農業の振興をはかるため、農用地の造成及び圃場整備を行うものである。能代市久喜沢字大内坂の畠地及び水田11,630m<sup>2</sup>の生産基盤整備地域内には周知の遺跡「大内坂II遺跡」が所在する。同遺跡は、東雲原野の原始時代及び古代の生活を知る上で重要な遺跡である。遺跡の事前調査を実施し記録保存をはかり、今後の資料とするものである。

### 2. 調査の要項

調査主体 秋田県教育委員会

**調査期間** 昭和52年9月15日～9月30日

**調査地点** 秋田県能代市久喜沢字大内坂43, 他

**調査担当者** 永瀬福男, 川村 正

**調査補助員** 小林鉄雄, 平川美樹也

**調査参加者** 佐々木信夫, 芹田芳雄, 芹田良雄, 鈴木市郎, 鈴木キノ, 鈴木幸子, 鈴木孫治郎, 佐々木為三郎, 佐々木愛子, 芹田トキエ, 芹田キセ, 佐々木カツ, 芹田清一, 佐々木謙, 七戸幸作, 岩森みよ, 工藤ゆき子, 丁寧ミヨ, 鈴木キヨ, 小野タイ子, 鈴木ふみえ, 斎藤アヤ子, 桧田キミエ, 川村いつ, 神馬當太郎, 伊藤秀次郎, 蝦名百太郎, 何保セツ, 笹森セイ子, 棚方カツエ, 工藤タミエ, 蝶名キワ, 神馬ヨシノ

**調査事務担当**

秋田県教育庁文化課 門間光夫, 富樫泰時  
東北農政局能代開拓建設事業所 伊藤茂雄, 佐藤秀逸

**調査協力機関**

東北農政局能代開拓建設事業所 能代市教育委員会

### III 調査の概要

#### 1. 調査方法

久喜沢部落から台地に登ると、広大な畑地がみえる。大内坂II遺跡は、台地の南縁から北に広がる。調査対象地（4,280m<sup>2</sup>）は、農用地造成及び開墾整備事業のため、雑木林が押したおされ、工事が開始されようとしていた。雑木林が除去された後には、縄文時代の土器片が点々と散布していた。

発掘区は、台地西側の小谷に沿って、A区（50m×46m）とB区（50m×36m）を設定し、これらの発掘を2m×2mで区切り、南北方向を算用数字で、東西方向をアルファベットで表現した。グリッドの名称は、算用数字とアルファベットの組み合わせで呼ぶこととした。遺構の実測は、すべて平板実測で実施した。

#### 2. 調査経過

9月15日、A区にグリッド設定のための杭を打ち、表土除去作業を開始する。9月20日までA区の調査を実施したが、縄文土器小片が数点出土したのみで、遺構は検出できなかった。9月21日、発掘調査をB区に移す。9月24日、遺構らしき梢円形のプランを確認し、精査したらブルトーザーによる抜根の痕跡であることがわかった。9月27日、小窓穴遺構を確認、精査する。9月28日、円

形の竪穴遺構を確認、精査する。9月29日、円形の遺構は、縄文時代の竪穴住居跡であることが判明した。9月30日、竪穴住居跡の写真撮影と実測を行い、大内坂II遺跡の調査を終了した。

#### IV 出土遺構と遺物

##### A 区

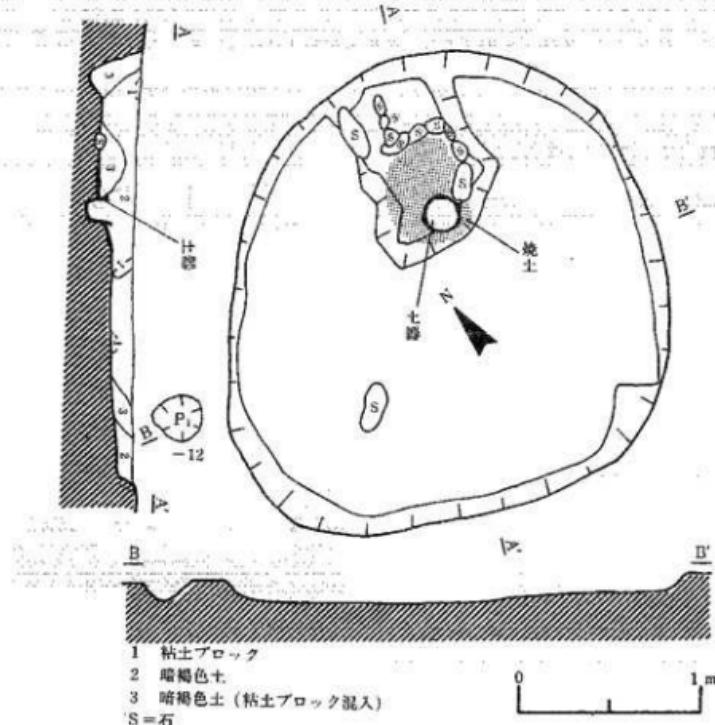
記録すべき遺物、遺構は検出されなかった。

##### B 区

竪穴住居跡1と竪穴遺構1が出土した。

##### 竪穴住居跡（第3図）（図版2）

（遺構の確認）4-n, 4-o, 4-p, 3-p, 3-o, 3-pグリッドで検出された。遺構確認面は、表土下の地山上面である。



第3図 竪穴住居跡

(平面形) 平面形は、ほぼ円形を呈するが、西側がややふくらむ。南北径 2m 60cm、東西径 2m 50cm を測る。

(壁・床面) 住居跡の深さは、10cmほどで浅く、壁はなだらかに床面に接する。床面は平坦である。

(炉) 炉は石突き炉であり、住居跡内の北壁によつたところに構築している。炉の構築は、まず、床面を隅丸長方形に 5~10cmほど掘り、この壁に沿つて河原石で石組みしている。河原石の長径、10~20cmで、大きな安定性のある礎は横位に、礎平な礎は縦位に埋設している。炉の南端には、径 15cm の深鉢形土器の胴部下半が埋設されている。火床面は赤褐色を呈するが、あまりかたくない。

(柱穴) 柱穴らしいピットは、住居跡の外に 1ヵ所 (P.) 検出されただけである。

#### 〈出土遺物〉 (第 5 図) (図版 4)

縄文式土器 (1~5) 出土遺物は、縄文式土器のみである。1 は、炉内に埋納されていた土器である。この土器は、深鉢形土器の胴下半部であり、胴部上半は欠失している。胴部には横位に縄文が施されている。色調は、内外面とも黒褐色を呈する。胎土には砂粒が多く含む。2~5 は、埋土中から出土したもので、斜縄文を地文とし、沈線文が施されている。後期初頭の土器であろう。

#### 豊穴遺構 (第 4 図) (図版 3)

(遺構の確認) 24-i, 24-j, 25-i, 25-j

グリッドの地山上面で確認された。

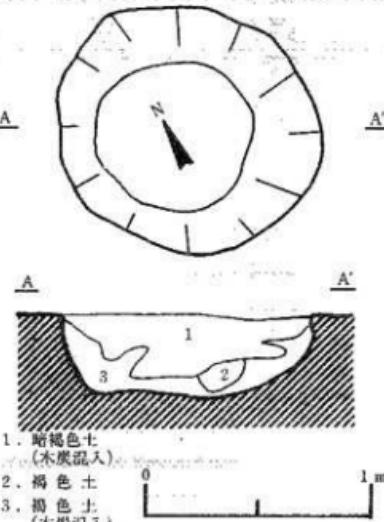
(平面形) 平面形は、径 1m 10cm ほどの円形を呈する。

(壁・床面) 壁は、四凸が激しく急傾斜をなすが、床面近くでゆるやかになる。床面は、わずかに凹凸をなす。

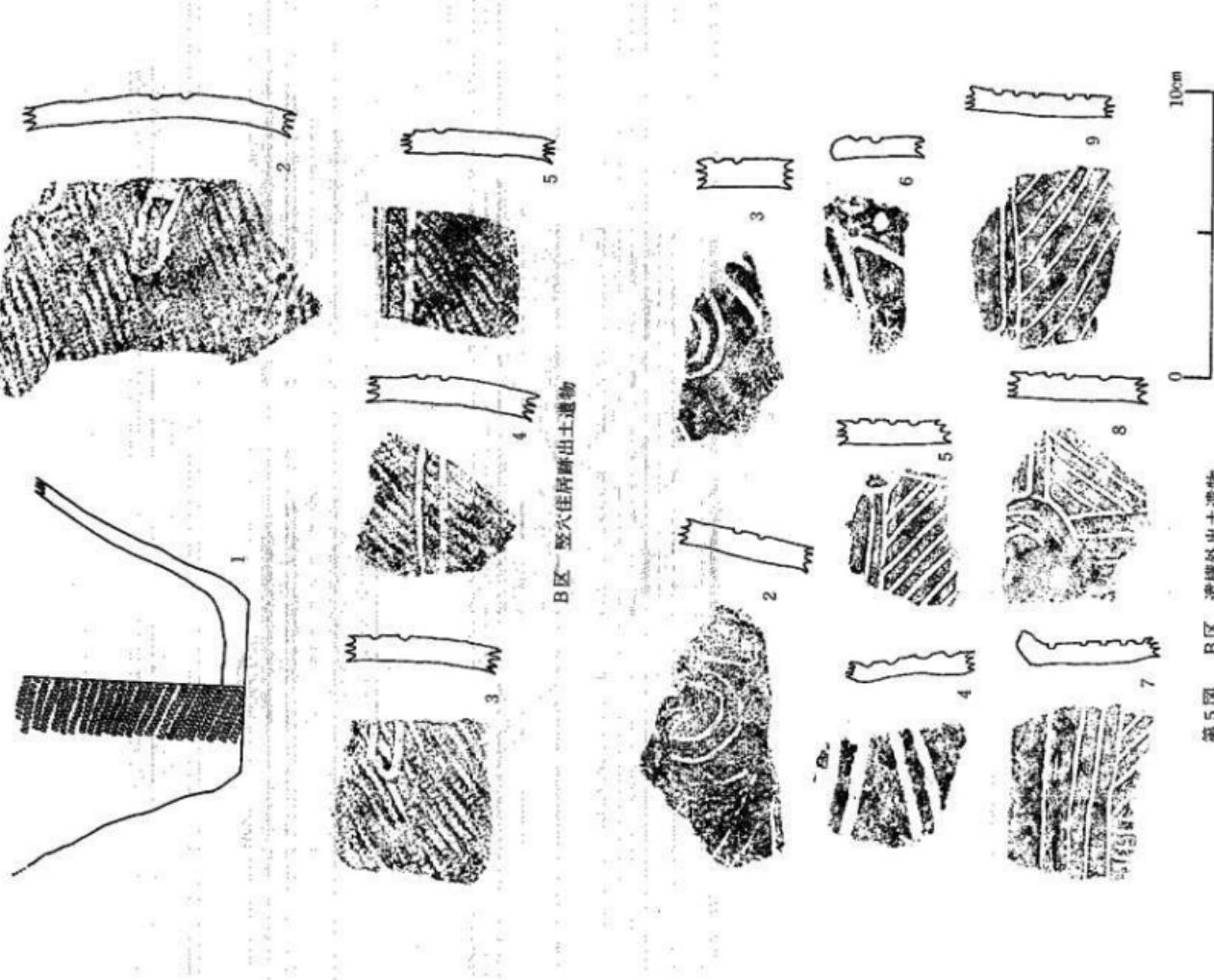
(柱穴) 柱穴は、遺構内外とともに検出されなかった。

#### 〈出土遺物〉

人工品であるかどうか不明であるが、床面から 2 個の円礎が出土した。凝灰岩質で、径 6cm の球形を呈する。



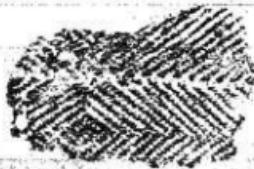
第 4 図 豊穴遺構



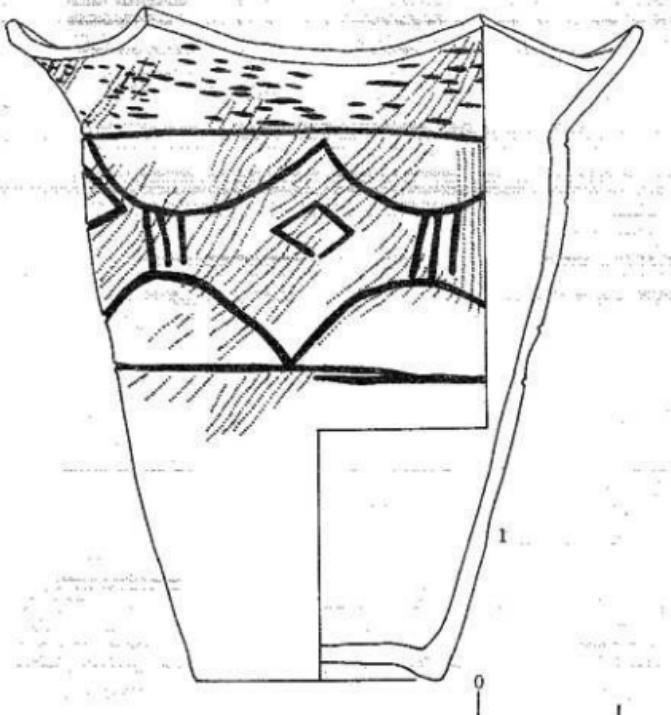
B区 竖穴住居断出土遗物

第5图 B区 遗物

10cm



14



第6図 B区 造構外出土遺物

## V 遺構外出土遺物（第5図、第6図）（図版4）

出土遺物は、縄文土器のみであった。器形、文様などから4類に分類した。

(a類) 沈線文の施文された土器であり、1~9がこの類に属する。

1は、ほぼ復元することのできた土器である。底部から胴部は円筒形をなし、口縁部は大きく外反する。口縁には6個の突起がある。底部は上底である。内面は、ていねいに研磨されている。外面には、斜位または縦位の縄文が地文として施文されているが、部分的に磨消されている。口縁部には横位の短い刺突文が地文されている。この刺突文は、細い棒状工具を右から左に押し刺すように施文している。頸部と胴部には1条の沈線がめぐる。この沈線間に弧状の沈線が施文される。

弧線の頂部から頂部には、3条の縦位の沈線が施文されている。胴部文様帯は、弧線、直線によつて5区画に分けられる。1区画には菱形の沈線文が施文される。しかし、1ヵ所だけ、菱形文の施文されないところがある。色調は、内外面とも炭化物が付着して黒褐色を呈するが、胴下半部は2次的火熱を受け赤褐色を呈している。口縁部径22cm。頸部径17cm。底部径9cm。器高24cm。2~9も曲線、直線の沈線文が施文されているが、地文として縄文は施文されない。

(b類) 細状撚糸圧痕文が施文された胴部破片である。10と11がこの類に属する。いずれも赤褐色を呈する。

(c類) 条痕文の施文された土器である。13がこの類に属する。

(d類) 縄文の施文された破片である。12と14がこの類に属する。14は羽状縄文である。

## VI む す び

大内坂II遺跡は、広い範囲にわたって遺物が散布していたが、今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1、竪穴遺構1である。

竪穴住居跡は、縄文時代後期初頭のものと考えられる。後期初頭の住居跡が検出されたのは、能代・山本地方では最初であり、貴重な資料を得たことになる。

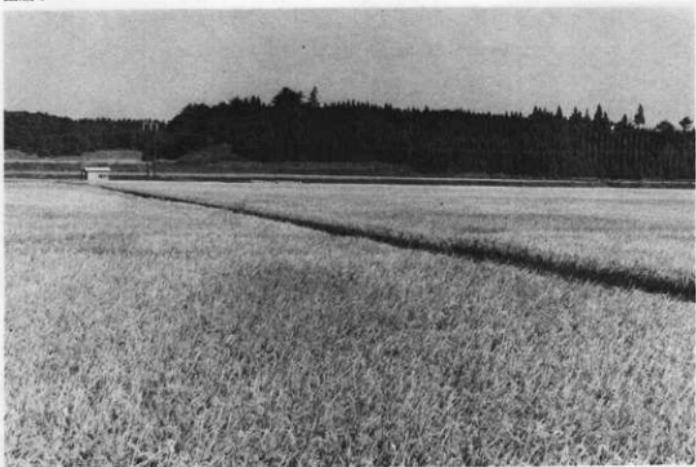
末筆になりましたが、本報告をまとめるにあたって、秋田県教育府文化課富樫泰時、秋田城跡発掘調査事務所小松正夫、日野久、石郷岡誠一、大館市史編纂室板橋範芳の諸氏に懇切な御指導と教示をいただき、また、東北農政局能代開拓建設事業所、能代市教育委員会には、発掘調査から遺物整理にいたるまで御協力いただいた。記して感謝の意を表するしだいである。

### 註

- (1) 大和久篤平「能代市金山チャシ発掘報告」秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部報告第1号（昭和32年）

- (2) 昭和47年に発掘されたが、報告書は未刊。
- (3) 伊藤穂秋、岩見誠夫、永瀬福男「能代山本地区庄城農道建設に伴う発掘調査報告書一八森坂、南山ノ上、サシリ台遺跡一」秋田県教育委員会（昭和51年）
- (4) 昭和52年8月、秋田県教育委員会が発掘調査する。
- (5) 能代市教育委員会「能代市大館遺跡(野代宮擬定地)」（昭和48年）「大館遺跡発掘調査概報」（昭和49年）「大館遺跡第4次発掘調査概報」（昭和50年）
- (6) 大和久義平「拍子所貝塚発掘調査報告書」

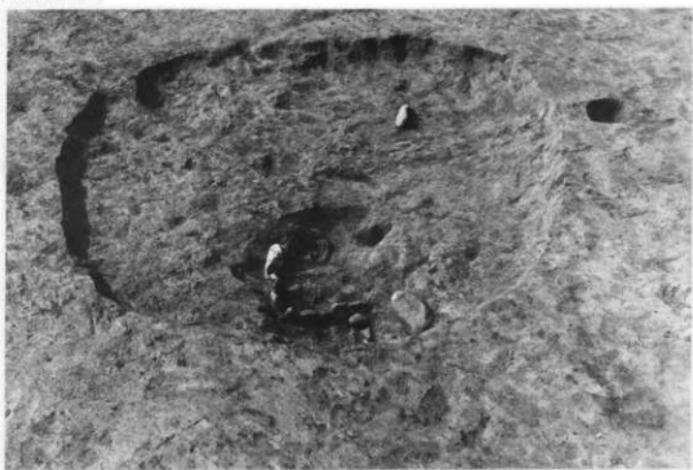
図版 1



遺 跡 遠 景



發 掘 調 査 風 景

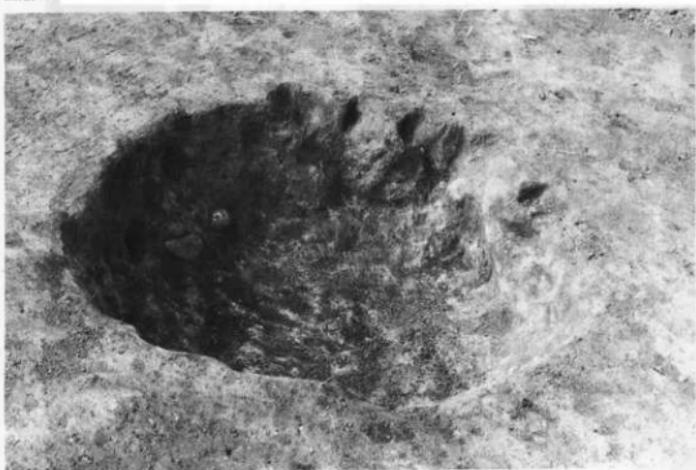


竪穴住居跡



竪穴住居跡内の炉

圖版 3



竖穴遺構



土器出土狀況

